

9月10日(水) 14:00～ 個人発表

14:20～ 太田

「現在の学生をとりまく環境および昨今の大学図書館環境の変化について : 状況整理」

<要約>

大学図書館の主な利用者である学部学生のことをよりよく理解するために、彼(女)たちの生まれ育った時代背景を探った。主な特徴として次の2点をあげた。①インターネットをはじめとする情報技術が急速に発展した時期に幼年期を過ごし、身近な存在として活用している。②就学年齢に達するころ「ゆとり教育」が始まった。またアクティブ・ラーニングの広がりなど、学習スタイルに変化がみられる。このような特徴をふまえ、大学図書館も変化するべきである。

<質疑応答>

佐藤 OPACにレビュー機能がある大学はあるか?

古庄 レビューではないが、武蔵美術大学でブックタッチというシステムがある。

山本 レcommend機能あり。Amazonの「この本を借りた人はこの本も借りています」という情報が表示される。

明大のOPACにはユーザーレビュー(管理者閲覧可)あり。

太田 反対意見として、学生が不適切な書き込みをする、先生から学術の多様性が失われる、等の意見が出るのが予想できるのでは。

15:10～ 佐藤

「特集コーナー『知の扉を開く、この一冊』実施報告書」

<要約>

年に4回、テーマを設定して特集を実施している。今年の春は、「知の扉を開く、この一冊」と題して、入門書、基本図書、概説書を中心に488タイトルを選定し、3カ月間、実施した。延べの貸出冊数は、899冊に及び、前年同月比で4月が1.6倍(255冊)、5月が1.24倍(260冊)、6月が最も多く1.9倍(334冊)の実績であった。

実施上の問題点としては、資料選定が委員4名で行われ、図書館全体の取り組みになっていないことである。

<質疑応答>

古庄 ディスプレイ上の工夫はあるか?

佐藤 分類番号順に配架。入りきらないものは平机に別置。特に読んでほしいものはブックスタンドを利用して配架。どれを面出しするかはワーキンググループで検討+適宜入れ替え。書評があるものは書評も挟む。

太田 貸出期間は?

佐藤 2週間(14日)。特集で扱っていない資料と同じ期間。

古庄 この特集のために新たに買った資料もある?

佐藤 若者向けの新書は新たに買い足した。岩波ジュニア新書などはタイトルによっては買っていたが、学生に読んでほしいのに抜けていたものもあったので買い足した。

- 佐藤 学生に、ビブリオバトルで紹介した資料のPOPを作ってもらい、展示しているコーナーもある。学生が書いたPOPは貸出を促進する効果がある。ゆくゆくは学生スタッフの棚をつくりたい。
- 現在の特集の選書はワーキンググループ+有志の職員2～3人。図書館全体で盛り上げていきたいのだが…。
- 加藤 新刊案内を全館員でチェックすることで、選書は全体でやるものだ、という意識が根付くのでは。それぞれが得意な主題で選書していくのも良い。
- 橋本 丸善・紀伊国屋からもらう新刊案内を3課でそれぞれ回覧し、欲しい資料にチェックをする。回覧後に選書に返し、委員会の人が最終判断をする。「学生がこういう本を読んでいる」という声が反映されやすい。購入希望をした人が責任もって重複調査をしている。
- 佐藤 選書については全員に担当が決まっているのだが、展示になると盛り上がらない。
- 加藤 強制でいいのでは。図書館長にも選書してもらう。図書館長がやっているとなれば半強制的に全員選書するのでは。対象学年を絞った方がより良いのでは。

16:00～ 橋本

「変化する場・人・資料を結びつける、コーディネーターとしての図書館員」

<要約>

高等教育（大学教育）を取り巻く環境の変化から大学図書館の「場」「人」「資料」、それぞれに求められている変化を考察した。

それぞれが抱える課題に対し、どのように各大学図書館・各図書館員が取り組むかが重要である。また、それぞれを結びつけるコーディネーターとしての図書館員は、今までとは異なる新たな図書館員の姿を求めていくことが求められている。

本来の図書館員の職務を忘れることなく、新たな時代のニーズにあった対応・サービスが行えるようにならなければならない。

<質疑応答>

加藤 形だけ用意すればいい、というのではラーニング・コモンズとして意味がない。

学生が質問にくるか、というのもあるが、逆にどれだけ学生とコミュニケーションをとっているか。

書籍のデジタル化は各大学でやるのでは費用がもったいない。…OCLC

図書館員の教員化というのはもっとも。職員であり、教員である。

自分のために、教員との連携を取って行って欲しい。図書館員が図書館員を育てるというのは限界がある。なぜなら主題がないから。教員にライブラリアンを教育してもらう。図書館員は主題を持つべき。

16:30～ 古庄

「本と人をつなげる取組み」

<要約>

所蔵している本をもっと利用してもらうために、図書館は利用者にどのようなアピールができるか、図書館以外の「人と本がつながる場所」に焦点を当て考察した。書店、ブックカフェ、イベントの3つを例に、それぞれから図書館に活かせる取組みを紹介。それらのテクニックやノウハウを大学図書館で取り入れるにはどのような準備必要で、問題があるのか、また、学生のアカデミックな興味を引き出すには、これらの方法に大学図書館としてどのような工夫をすればよいか、ということが課題と考える。

<質疑応答>

加藤 書店は売るため、大学は学修のため。一般書と学術書の違いは。1・2年生は一般書の中から学術的なもの、3年生以上になると学術書が必要になってくる。

古庄 本を読まない人に、入口として提供したい。

加藤 大学は歴史のある本を並べないといけない。(1980年に出た本、などの古い本)
大学は、古い本をどれだけ選書して並べておけるか。

16:50～ 長谷川

「図書館とラーニング・コモンズ」

<要約>

共通テーマの「場と人と資料を結び付ける」の中から、「場と人」に焦点を当て、ラーニング・コモンズについて調査した。調査の結果、「ラーニング・コモンズを図書館につくる」という考え方ではなく、「図書館全体がラーニング・コモンズである」という考え方が望ましいとわかった。「図書館＝ラーニング・コモンズ」になるために、図書館職員は必要な機能(資料・人・サービス・施設・設備)を整える必要があるとわかった。

<質疑応答>

加藤 キャンパス＝ラーニング・コモンズというのが理想。

図書館＝メイン・ライブラリー、研究室＝ブランチ・ライブラリーになるのがいい。

17:00～ 山本

「場・人・資料を結ぶコーディネーターとしての図書館員」

<要約>

場・人・資料を結ぶコーディネーターとしての図書館員というテーマを、場所を図書館、コーディネーターとしての図書館員という2つの面から考察した。まず場所としての図書館に存在するコンテンツは、従来の「資料」の概念を超え、人・データ等を含む「知の集積」となっている。次に図書館という空間や資料をより活用する機能として、図書館員はあるべきである。具体的な活性方法として、利用者の「読む・書く・調べる」活動のインプット・アウトプットをサポートすることを一例とし、大学図書館での実践事例を7つ紹介した。

<質疑応答>

加藤 LILOなどはリテラシー教育の一環かと。フェイストゥフェイスでやっていたことをオンライン化した。どちらがいいか、というのはあるが…。

山本 院生に、「実は知らない」ということを気づいてほしい。

加藤 NDCでは限界があるということ…？

山本 様々な視点から分類されるべきではないかと思う。

古庄 (図書館で) コミュニケーションが生まれる、ということが大事。

17 : 40 終了